

今月の谷口雅春先生のお言葉

子供の善性は必ず輝き出てくる

取越苦勞をする必要はない

多くの母親は子供のことをあまりに取越苦勞とりこくろうするため、却かえって子供に悪思念あくしねんを放送して子供の健康や運命を害している。或ある母親は一瞬間でも自分の眼めの前まへにいないと心配でたまらないのである。彼は自分の想像うちの中で、躓つまずいて転んでいる自分の子供の姿を思い浮べる。自動車にひかれて死にかかっている自分の子供の姿を思い浮べる。水みづに陥はまって溺おぼれかかっている自分の子供の姿を思い浮べる。世の母親よ、何故なぜあなたはこの反対をしてはい

けないのか。こんな取越苦勞が起るのは、子供を神の子だと思わないで人間の子だと思っからである。神の子は神が育て、人間の子は人間が育てる。人間の子だと思ものは終世しゅうせい、取越苦勞をして育てねばならぬ。子供を神の子だと思っものは、子供を尊敬して出来るだけその世話をさせては頂たまぐが、神が守っついで給たまうと信たずるが故ゆえに取越苦勞は必要はないのである。人間力で子供を生かすし得うると思っなら終日終夜しゅうじつしゅうや起きて子供の番をしておれ。それは出来なからう。出来ない間に子供を生かしているのは神の力である。

（新編『生命の實相』第22巻2頁）

まず子供に「神性」があることを認めよ

諸君は光がそこに輝き出せば陰影がそこにおのずから消える事実を見られたであろう。「存在の世界」に於ては「認める」とは「光を点ずる」ことである。如何に潜在的に存在していようと、認めなければそれが存在していることが現実に見えて来ないのである。如何に多くの宝が庫の中に藏われていようと燈火がそこになければその宝は無いに等しい。だから諸君よ、諸君の子供にそして諸君の教え子に宿つているところの「神性」(神からの大遺伝)を認めることから始めよ。そして光が暗を逐い出すように、吾々がありありと彼に宿つている「神性」をば認めさえすれば、その「認める力」の輝きによつて、如何なる悪癖も悪遺伝も数年のうちに根絶することは又難くはないのである。

(新編『生命の實相』第22巻170〜171頁)

子供の美点のみを強調しよう

諸君よ、まず子供に教えよ。彼自身の生命の尊さを。人間の生命の尊さを。そこには無限力の神が宿つていることを。展けば無限の力を発し、無限の天才をあらわし、彼自身の為のみならず、人類全体の輝きとなるものが彼自身の内に在ることを教えよ。彼をして彼が地上に生命を受けて来たのは、自分自身のためのみでないこと。人類全体の輝きを増し、人類全体の幸福を増すために神が偉大な使命を彼に与えて来たのであることを教えよ。この自覚こそ、最初の最も根本的な自覚であつて、この自覚が幼時に植えつけられたものは必ず横道に外れないで、真に人類の公けな喜びのため何事かを奉仕しようとして喜び励む人になるのである。

常に子供を鞭撻して、彼の善さを力説せよ。彼の美点を強調せよ、自分自身の有つ長所を自覚せしめよ。ここに子供を教養する極意があるのである。美点を強調し、

弱点を忘却せしめ、失意に枉屈(わたく)編註・抑えつけられて屈すること)する時間を希望に躍進する時間に変化せしめよ。彼もし希望に輝き、美点にのみ躍進を続けるならば、弱点に執着(しやくしやく)し、弱点を考え、失敗を悲しんでいる暇はないのである。心を弱点に置かないとき、行いに弱点を繰返す暇がないとき、その弱点を再び繰返す傾向はうすれて来るのである。ここに彼の美点のみが発揮され、長所のみが生長する。

(新編『生命の實相』第22巻174〜175頁)

「今に善くなる！」という讚嘆の種子を蒔こう

言葉は種子を蒔く。それは必ず芽を出して実を結ぶのである。(中略)種子は、遙かの幼時に蒔かれている。詳しくいえば幼児以前の胎教に於ても蒔かれている。胎教以前にその魂の前身の経験や、祖先の遺伝の種子もあるのである。因果はめぐる、だから吾々はこれらの悪い種子の力を奪ってしまつたために反対の種類の種

子を蒔かなければならないのである。それは賞讃の種子である。讚嘆の種子である。如何に子供の現在の状態が賞めるに値しなくとも、「今に善くなる！」「きつと偉い人物になる！」こういうふうな漸進的進歩の暗示を与えるに相応わしくないことはないのである。そしてその暗示の力で、漸進的にその子供を良好化して行くことだ。(中略)

諸君よ、吾々が毎日必ず子供の心に対して「この馬鹿者奴が！」とか「貴様は実に不良だ！」とか始終罵声をあげせかけることによつて子供の心に「悪い種子」を蒔いてさえも、尚(なほ)それほどに実際に馬鹿者が出現せず、不良が出現しないのは何故であるか。これこそ実に強く神から譲られた「神性の遺伝」が吾々にはたらいていくれる証拠であるのである。吾々はこの「神性の遺伝」に敬礼し、感謝し、日夜この神性に対して讚嘆の声を雨ふらさなくてはならないのである。

(新編『生命の實相』第22巻167〜169頁)